

第 12 回 練馬区幼保小連携推進協議会 要点録

開催日時	平成 31 年 1 月 10 日（木） 午後 3 時 30 分～午後 5 時 00 分	
会 場	練馬区役所本庁舎 12 階 教育委員会室	
出席者	会 長	教育長
	委 員	田中泰行、中島眞佐美、桑原久美子、立川由美子、世古徳浩、中村直人、堀和夫、小暮文夫、芝田智昭（敬称略）
	事務局	教育施策課長、学務課長、こども施策企画課長、保育課長、教育指導課指導主事（幼稚園担当）
アドバイザー	酒井朗	
傍聴者	なし	
案 件	1 平成 30 年度練馬区幼保小連携地区別研修会の実施報告について 2 平成 30 年度幼稚園・保育所と小学校との懇談会の実施報告について 3 幼稚園・保育所と小学校との連携に関する実態調査の実施について 4 その他	

1 平成 30 年度練馬区幼保小連携地区別研修会の実施報告について

会長

それでは、第 12 回練馬区幼保小連携推進協議会を開会する。

まず、案件 1 の平成 30 年度練馬区幼保小連携地区別研修会の実施報告について、事務局から資料 1 の説明を。

事務局

<資料 1 について説明>

会長

今回も幼保小連携の研修会を実施したが、参加した方もいらっしゃると思うので、今の報告について意見等があれば。

委員

3 ページの小学校意見、「小学校の先生方に園での保育体験をして欲しいと思った」だが、小学校の先生からこうした希望が出たことは大変嬉しいことであり、是非とも幼稚園、保育所の保育内容を理解していただきたい。

また、一番最後の意見で「小中の連携も大切だが、それ以上に幼保小の連携が大切だ」ということを小学校の先生が言ってくれている。今後もさらに連携を深めていけたらと思うが、こういった小学校と幼保の話し合いにおいて、小学校の先生からもっと疑問が出てきてほしい。

例えば、幼稚園や保育所では文字や数の体験をどのようにしているのか等、具体的な質問が出てきてほしいと思う。小学校に上がる段階では文字や数はゼロの状態だと考えられているように、幼保の教育と小学校以上の教育とはまだ切り離されているように思える。幼児期にも生活の中で文字や数の経験はたくさんしているが、それぞれの園によって環境のしつらえ方はかなり違っている。そうしたところを具体的に話し合える場としていくためには、小学校のほうからもっと質問がほしい。そういう意味では、以前も意見したが、ただ漫然と話し合うのではなく今日は数の体験について話すとするなど、テーマを決めた話し合いもとても大事ではないかと思うので、改めて申し上げた次第である。

委員

6月の管理職対象研修、また8月の担任対象研修の参加校(園)数についてだが、小学校は100%近く研修に参加していると思っていたが、そうでもなかったようだ。年度当初には教育指導課から日程を聞いているので、100%に近い形で出席できるように校長会でも来年度きちんと取り組んでいきたい。少し残念な数字だと思うので、小学校長会でもしっかり周知していこうと考えている。

委員

今のお話と同様に、区立保育所も出席率が100%ではなかった。特に園長の参加日に、園長が講師として出なくてはいけない研修会と重なってしまい、若干人数が減ってしまったのもあったかと思うので、なるべくそうした調整ができるような形だとよい。

懇談会では、地域の先生方と直接話せることで、小学校を訪問しての交流会等が具体的な形になってつながってきていると感じている。今後も継続していくことで、こうした活動もさらに広がっていくと思う。

2 平成30年度幼稚園・保育所と小学校との懇談会の実施報告について

会長

続いて案件2の平成30年度幼稚園・保育所と小学校との懇談会の実施報告について、事務局から説明を。

事務局

<資料2について説明>

委員

4ページの設問2、幼稚園の一番下の項目に関してだが、幼稚園では幼児教育研修会を行っている。公開保育ということで、近隣の小学校や保育所の先生には伝えているが、やはり年間計画に入っていないと参加が厳しいところがあると思う。幼稚園の環境等も実際に見てもらい、意義等を話し合えるととても有意義になる。実現してもらえると私たちも勉強になり、皆さんからも質問等を出しやすくなるかと思うので是非お願いしたい。

委員

4ページの設問2、保育所の「小学校の校長先生や教員の方と話ができる貴重な機会なので、可能であれば開催校が毎年変わることを希望する」、「地区内には多くの小学校があり、卒園児も広範囲に就学している。貴重な懇談会なので、より多くの小学校で開催して欲しい」ということだが、今年度懇談会を行った8校については、年度当初に小学校長会の中であらかじめ担当校長を決めていた。そのため、小竹小学校から大泉南小学校まで全て担当校長の学校となっている。例えば光が丘地区で言うと、2年連続で同じ光が丘夏の雲小学校でやっているということで、先日、事務局から私に電話があり、別の学校に変えることができないかという要望をいただいた。小学校長会の方で決まった8校の担当の校長先生が、例えば今年と来年同じであっても、学校は変えてほしいと。そのため、地区の中で相談して、同じ学校での連続開催を避けることは小学校長会の中で確認したので、今後は毎年違う小学校で体験ができると思う。

委員

現場で「ねりま接続期プログラム」をどう活用していくかというのは、園長連絡会や地区ごとの園長会でも話をしている。今回の懇談会でも何地区かで「ねりま接続期プログラム」を各自持ち寄り、内容について小学校と意見交換を行った。各園の取組にはまだばらつきがあるが、懇談会でプログラムについて幼稚園、保育所、小学校で話をするきっかけになり、取り上げた地区では有意義な時間が持てたかと思っている。また、園長や副園長には様々な情報が入るが、実際に活動し子どもたちを保育しているのは現場の職員である。懇談会には園長、副園長、校長先生、1年生の担任の先生が出てきてくださるが、小学校では研修の一環として、保育所を希望した新任の先生が夏に保育所での現場研修を受けている。実際に現場の保育士や園長と話す機会はとても参考になると思うので、そうした機会が増えていくとよい。

アドバイザー

懇談会も研修会も練馬区は非常に活発だと思う。研修会の講師の酒井敏男先生と後で話をしたとき、練馬区は全区でこれを取り組んでいるということに大変驚かれていた。こうした自治体は、実はあまりない。小学校の先生が保育所や幼稚園の先生と一緒に研修で一堂に会する形の場をしっかりと持っているのは非常に大事であり、是非継続していただきたい。また、例えば学童保育職員や家庭支援のコーディネーターの方等、幼保小連携に関わりのある他の方々にも、今回の酒井先生の講演会に参加出来るような可能性をご検討いただければと思う。

会長

子育て関係では、我々もどこに声をかけていいかわからないほど様々な人がいる。

アドバイザー

非常に多くの人がいるのでとても難しいが、非常にいい機会ではないかと思った。

会長

こういった講演会をオープンな講演会にするというのは良い考えではないかと思う。

事務局

前回の協議会でも意見をいただき、今回「ねりま接続期プログラム」は保健相談所や児童館、学童クラブへの配付を行った。こうした区の中の関係部署等を含めた幼保小の連携の充実については、引き続き研修会も含めて検討していきたい。

3 幼稚園・保育所と小学校との連携に関する実態調査の実施について

会長

では次、案件3「幼稚園・保育所と小学校との連携に関する実態調査」の実施についての報告を事務局に願います。

事務局

<資料3 - 1、3 - 2について説明>

会長

実態調査では本当に多くの施設や関係者の方々にご協力をいただいて90%以上の回収率を得られた。これは本当に驚くべきことであり感謝申し上げたい。今、事務局から概要についての説明があったが、全体版について細かく見ていくわけにもいかないため、事務局の説明の範囲内でご意見、ご質問等があればお出しいただきたい。

委員

資料3 - 1、まとめ2ページの6「ねりま接続期プログラム」を読んでいない主な理由で「存在を知らなかったから」が63%とあり、小学校長会はもっと宣伝、アピールをしなければいけなかった。学校には文部科学省や東京都等から本当に多くの資料が届いており、その中で必ず目を通す必要があるものについては、こちらから声かけをしていかなければいけないというところで、少し反省している。

委員

幼稚園長会でも話が出ているが、当園からも複数の小学校に入学するが、近隣でこの地区のような形で会う機会や、なにか枠で研修する機会のようなものがあると顔なじみにもなってくるし、お互い声もかけやすくなってくると思う。ただ、その区切りが難しく、小学校も受入れを増やすというのは、子どもたちにとってもどうなのかというところもあると思うので、その辺はよく考えないといけないが、そうした方法もどうかと話し合っている。

委員

保育所長会での情報交換では、「今後実施したい取組・教育委員会に望む取組」のところの「実施したい主な取組 幼児と児童の交流事業」というところで、自分のいる園でも2校または3校、子どもたちが行く予定の学校に直接連絡をとって、1年生との交流について依頼をしている。授業等の関係で時間の調整も必要になるため、毎年お願いしている学校では、おそらくカ

リキュラムの中に「幼児との交流」のように入っていて、1年生の担任の先生は当然やるものだと考えてくれているようで、連絡を取り合って計画を立てられるようになっている。

ただ、保育所の数があまりにも増えてしまった。区立保育所はもとの土台がしっかりあるため交流しやすいが、新しい私立保育所をどうやって仲間に入れられるかと言ったらおかしな言い方だが、学校側もそう何度もできないだろうから、先ほどのお話にあったように、地域でというくりがあると参加や交流がしやすいのではないかと思う。

アドバイザー

これは非常に大事な貴重なデータだが、これは4年毎に実施の調査か。

会長

期間は決めていないが、定期的に行っていきたいと考えている。

アドバイザー

少しインターバルを置いて継続的に行ってもらえるとありがたい。例えば今回は前回から非常に園数が増えている中で、かなりの園が交流事業の実施はほとんど変わらず継続的に取り組んでいるという意味では、この事業が定着しているという印象を持った。

ただ、全体版を見ると、認証保育所はなかなか関わっていないようである。非常に小さな施設のため、難しいということは重々承知しているが、児童との取組や職員との取組もほとんどのところがなかなかできないようである。そのため先ほどのお話にあったように、地区で何かままとするとそういう小さな施設の方も入れるような仕組みになるのかと思った。今後、こういう多様な施設が増えてくる中で、どうやって巻き込むのかということを考えていかなければいけないのではないかと、この全体版を見て感じた。

会長

地域を小さくすると色々な施設が交流しやすくなることもあるかもしれない。

あまりブロックが大きいと、なかなか集まれないこともある。

アドバイザー

研修時間もあまり長くすると、先生方はなかなか外に出にくいので、あまり仰々しくせず、それほど長時間でなくてもいいのではないかと思う。

会長

気になったのは、幼稚園と保育所間の交流状況が50%に達していないことである。今、幼稚園も預かり保育がほとんど当たり前ようになっており、そういう意味では、幼稚園も保育事業を展開している。また保育所も、幼児教育についてほとんど幼稚園と同じように実施しなくてはならないようになっているので、幼保の連携もこれから非常に重要になってくると思っている。そうした中、「交流の方法がわからない」という回答が36%もあったということは、教育委員会でも仕掛けを考えていったほうがいいのではないかと思う。もっと交流してほしい。小学校との連携はもちろん大事だが、せっかく幼保小の三者があるわけだから、幼と保の間で

連携してもらいたいという思いがある。こうしたこともこれからの課題かと思う。

委員

今のお話は、そのとおりだと思う。この交流ができていない主な理由の中の「その他」のところに「幼保小の連携を優先したい」とあるが、幼稚園や保育所の人と話していると、「小学校はこうだろう」という話になっていって、どうしても「力を合わせて小学校にお願いしよう」といった話になってしまうところがある。

幼稚園の文化と保育所の文化とはやはり違うところがあり、それをどうやってすり合わせていくかが大事であると思ってほしい。ただそれが進んでいくのはこれからだろうと思う。

会長

教育委員会も、是非一緒に考えていきたい。

アドバイザー

この概要版の「幼児と児童との交流事業の実施状況」のところに、「人事異動のため交流が途切れてしまった」とある。この状況はよく理解できる。担当の先生が異動したら事業の実施も終わってしまうのではなく、年度計画の中にきちんと入っている形で継続し、人事異動とは関係ない形で何とかできないかとのコメントを見て思った。

委員

近隣に私立幼稚園が何園もある。区立保育所も、小学校との最初の交流は、どうやって小学校とコンタクトを取り、交流を持とうかというところから始めたので、今、幼稚園と保育所との関係は、まだその段階にあるのだと思う。近隣の保育所の子ども同士で交流していくと、同じ地域で同じように育て、違う保育所での顔なじみができ、そこで同じ小学校へ行くのだねという話になって学校につながっていく子どもたちの姿もあるので、私たちも幼稚園との交流を進めていきたいと思う。

また、近隣の小学校からは、5年生の生徒がクラス単位で園に来てくれる。生徒たちが帰っていくときには、小さい子がお兄ちゃん、お姉ちゃんと言って慕って生徒の後ろをついて回っている。約40分の交流の時間の中で「楽しかった、もう一回来ていい？」と生徒たちが帰っていく姿を見ると、こうした自然な交流は大事だと思う。このような何気ない交流を数多くしていけるとよい。

会長

今回の調査については、是非継続して経年で変化を追っていきたい。またこの調査を行ったことにより様々な課題が出てきたかと思うので、それについても事務局として受けとめながら、次の調査では数値がさらに向上することを目標として行っていきたい。

委員

私はこの会の発足当初から関わっているので、もう5年以上経つのだろうと思うが、2、3年前にお話したように、障害児の問題が今でもある。全般的に障害児が増えており、特に区

立幼稚園では、本当に多くの障害児を抱えていて、大変だなと思っている。中でもこの障害児に関する幼保小のつながりというのはとても大事だと思う。ただ、この中で常に障害児の問題を取り上げるというのも難しいかと思う。

それからもうひとつ、この頃顕著になってきているのは、外国人の問題である。私どもの幼稚園でも、この3、4年で3倍くらいに増えているので、恐らくこれは保育所でも同じことだろうと思う。今後さらに増えていこうと思われるので、その対応の問題も、全体的に区としての幼保小として話をしなくてはいけないのではないか。

それから少し気になっているのは、まだ顕著ではないが、特に練馬区の場合にはまだ安定しているかと思うが、経済格差の問題が出てくるのではないかと思う。今回のこの調査のように、何年かに一度このように脈々と続けていくことも大事だが、より深まっていく過程の中で、障害児や外国人の問題、加えて経済格差といった問題も折り込んでいくために、深化させていく必要があるのではないかと思う。こうした複数の課題を一緒に進めていくのは難しいかと思うが、是非教育委員会で、どのようなシステムでこれを進めていったらいいか考えてもらいたい。

会長

実は、今、委員がおっしゃった内容を私もまとめて言おうかと思っていたところである。冒頭、テーマを決めて議論することが協議を深めることにつながるのだというお話をいただいた。また、一方通行ではなく双方向の議論をしていかななくてはならないということ。この幼保小の連携のあり方を考える際、ひとつの頂点が「ねりま接続期プログラム」を作ったことだったと思う。これはある意味ではひとつの目標を達成できたということだが、プログラムを作ったこと自体でよしとするのではなく、いかに子どもたちのためにプログラムを活用するかということが一番大事である。こうしたことについて深められるような議論ができるとよかったのだが、今日のところは平成30年度の実績の報告という形になってしまった。

「ねりま接続期プログラム」の活用についてはこれからも議論を深めていきたい。議論を深め、実践をいかにやっていくか。実践をすることによって出た課題をこの場で洗い出して、その課題を乗り越えながら、よりグレードアップさせていくことが大事なのではないかと考えている。

新たな課題にもきちんと向き合っていかなければならない。今、委員のお話にあった障害児の問題は、当初からこの幼保小連携の組織、協議会を作ったときから出ている課題であり、宿題としてずっと我々が預かっている課題だと思っている。外国人や経済格差の問題も含めて、幼保小の観点からしっかりと捉え直し、深めていくことを今後幼保小連携の形の中でやっていければいいと私も思っている。是非皆様方のお知恵を借りながら、この幼保小連携協議会を継続して行っていきたい。

平成31年度については、改めて連絡をするということで、本日出た様々な意見をしっかりと事務局としても踏まえつつ、先ほど酒井先生からお褒めいただいたこの幼保小連携は、練馬区の特徴のひとつとして継続し、一層深めていくということで、皆様方のお力添えをお願いして本日は閉会する。

(閉会)